

法隆寺所蔵金属製容器の調査 (1)

平城宮跡発掘調査部・埋蔵文化財センター

平城宮跡発掘調査部考古第一・二調査室と埋蔵文化財センター遺物処理研究室では、1992年6月から1993年3月末日までに、古代から中世にわたる法隆寺所蔵の青銅製容器計45点について、考古学的観察と科学的分析の両面から調査を行った。調査は次年度も継続するが、これまでに判明した成果の一端、とくに碗・皿類について報告する。

1 考古学的調査

古代の青銅製容器は、いずれもクロコで厚さ1mm前後に削り、薄手に仕上げるのが特徴である。丸・平底碗は口縁部内端が肥厚し、体・底部の内外面に多数の沈線がめぐり、口縁外面にのみ1条の沈線がめぐり、前者は古墳出土品に類例があり6世紀末～7世紀前半、後者は法隆寺献納宝物(東京国立博物館蔵)の八重碗と同類で8世紀に入る。高台付碗は托(2)とセットになる小型品(1)と、体部に稜があるやや大型品(4)とがある。前者は中国・朝鮮半島出土例からみて6世紀後半、後者は正倉院御物の稜碗に類似するがやや浅目であり、8世紀末～9世紀初頭頃に比定できよう。稜碗の蓋1(3)は深め、蓋4(5)は浅目である。前者が8世紀中頃前後、後者が8世紀末～9世紀初頭頃になろう。托2(6)は碗の受部が高いのが特徴。中国例では9世紀中頃になって受部の高い例がみられるが、日本の三彩、須恵器には8世紀の例がある¹⁾。

中世の青銅製容器はいずれも厚さ3mm前後と古代に比して厚手となる。密教系の容器が主である。資料の多い六器についてみると、六器13(7)は碗の体部が直立気味で高台が高く直立し、托の高台も高く直立する。法隆寺の資料はないが、平安時代後期～鎌倉時代前期には碗の体部は外反気味で、托の高台も低い。六器13は鎌倉時代中・後期になろう。平安時代前期の六器はなお薄手であり、厚手になるのは平安時代中期か後期になる。二器1-1(9)も鎌倉時代中・後期。六器5(10)は六器13に近いが、六器9(11)は碗の高台が太く、托の高台が高くなる。室町時代に入る可能性がある。高台付皿4(8)は厚手。比較する資料はないが、中世であることはうごかない。(毛利光俊彦)

2 科学的調査

法隆寺に伝世する青銅製容器に対する科学的調査を考古学的調査と同時にを行った。X線ラジオグラフィによる構造調査と、蛍光X線分析及びX線回折分析による非破壊的手法による材質調査を中心に、製作技法や材料の歴史的変遷と、器形などの形式的編年との相関を探ることが目的である。調査した碗や皿類の中には、比較的平面性が良く、また伝世されていたおかげでさびによる腐食がほとんどないため、非破壊的手法による蛍光X線分析によっても、かなり定量的の良い分析結果が期待できる資料が何点か見受けられた。

今回の調査で得られた成果のひとつは、古代、特に奈良時代までの「佐波理」の材質をほぼ定量的に把握できた点であろう。表に示したように、古代の金属を特徴付ける鉛 (Pb)、銀 (Ag) などの元素を微量に含むものの、基本は銅 (Cu) と錫 (Sn) からなる、いわゆる青銅製で、錫の含有は18~22%程度で、残り80%近くは銅である、と考えられる。個体差などを考慮する必要があるが、正倉院宝物に対して行われている最近の調査で示された結果²⁾でも同様の傾向がみられる。さらに製作技法の検討を行っていく予定である。青銅製品も、時代が下がるに伴い、錫が減り鉛が増える傾向がみられ、肉厚になり重量感が増してくることに対応する。今後、分析点数を増やしていく中で、形式的編年との相関をふまえながら、銅製品の材質的編年の体系化をはかっていきたい。(村上 隆)

1) 毛利光俊彦「青銅製容器・ガラス容器」(『古墳時代の研究』8) 雄山閣 1991

異淳一郎「陶磁—原始・古代—」(『日本の美術』No235) 至文堂 1985

2) 木村法光・成瀬正和・西川明彦「年次報告」(『正倉院年報』第12号) 1990他

古代「佐波理」の蛍光X線分析の結果 (%)

X線透過撮影 皿2-1 (×1)
(底面に「す」が認められる)

顕微鏡観察 鉢6 (×10)
(底面の欠損部に埋め込み補修がなされている)